

保険と共済 (3) 戦友共済

わが国の「共済」は、その淵源をたどれば、戦前の産業組合運動にあるが、協同組合による保険という実態を備えるのは戦後のことである。戦後の協同組合法において、「協同組合法の中には、単に共済をはかる」と規定されているが、その事業について具体的な説明はなかった。「共済をはかる」という規定を限定的に理解すれば、現在の協同組合保険への展開はなかった。しかし当時の協同組合は、組合員の生活からの必要性を感じ、広義に解釈して戦後の「共済」が誕生したのである（本位田祥男「協同組合の共済事業」『共済と保険』1960年を参照）。

戦後において規定の解釈によって、今日の共済事業が誕生したのであるが、戦前の産業組合法においては、今日のような「共済」事業に展開する文言はなかったようだ。「共済」という用語は法的な概念ではなく、共通した経済基盤をもつ限られた人々が掛金を拠出して相互扶助を行う、いわば互助会のような仕組みという意味の「普通名詞」として使われていた。これに対して、「保険」という概念は、戦前においても法律で明確に規定されていた。法律に従って理解すれば、保険は前払確定保険料式のリスク移転手段であった。

このように考えると、戦前において「共済」は、法律用語として「保険」に対立する概念ではなく、保険を含む相互扶助一般を意味していた。戦前において共済生命や医師共済生命が「共済」という名称を社名に含めたという事例は、保険が共済概念という上位概念に含まれる概念であったということを示唆するものである。これに対して戦後の一時期において、共済と保険が対立的な関係にあったという事実は、前述のように共済規定の解釈によって、協同組合保険が誕生したことを原因とするものであった。保険陣営は協同組合保険に保険という名称を使わず「共済」とし、共済陣営は保険とは異なる「共済」の独自性を主張することによって、保険との同一の監督を回避したといわれている。これらの真偽はさておいて、法的概念の「保険」と普通名詞の「共済」という非対立的図式が、戦後の共済事業の進展の中で崩れたのであった。

ところで、近代保険会社が、「扶け合い」を強調して保険募集を行うことについては、古くから問題が指摘されてきた（たとえば、佐波宣平「共済保険と『扶け合い』運動」『共済と保険』昭和35年）。保険が上位概念の共済の「扶け合い」を含むことは間違いないが、募集において敢えてそのことを強調するのは、近代的な保険商品に対する誤解を招くのではないかという問題である。

では、保険会社とは違って、現代の共済が「扶け合い」であるといえるのだろうか？この点を理解する上で、協同組合保険としての「共済」という商品の特徴を確認する必要がある。保険技術的にいえば、共済団体の提供するものは基本的には前払い確定保険料式の「商品」である。この点では、保険商品となんら変わるところはない。共済商品は多様なので一概に論じることは難しいが、あえて基本的な共済の特徴を指摘するとすれば、共済金削減規定と内部補助の二点である。

共済金削減規定とは、共済事故が多発して共済金の支払いが巨額に上った場合は、共済金を削減によって共済団体の会員全体が負担するというものである。ちなみに相互会社の保険金削減規定は、一連の保険業法改正のプロセスの中で契約者保護の観点から削除されている。次に、内部補助の例として均一保険料体系をあげることができる。すなわち、年齢にかかわらず一律の掛金という料率体系は、死亡保障を前提とすると若い人から高齢者への内部補助を生む。保険会社の場合は、保険市場を通して一般の人々に保険募集を行っているため、内部補助を含む保険商品を提供した場合、逆選択が生じて市場が非効率となる。しかしながら、共済団体の場合には、比較的共通の基盤をもった会員が加入しているため、逆選択のコストはそれほど深刻なものではない。なお共済金削減規定と内部補助の他に、剰余の組合員への配当を強調する共済団体もあるかもしれないが、相互会社でも同じことなので、とくに共済の特徴だとはいえない。

このように考えると、保険にはなく、共済にはある「扶け合い」とは、ネガティブには共済金削減規定、ポジティブには「内部補助」であるといえる。共済団体の「扶け合い」は、組合員の間での連帯があるからこそ維持できるものである。そのため保険会社が募集活動で「扶け合い」を強調することが消費者の誤解を招くのと同様に、共済の推進（募集）過程で「扶け合い」を過度に強調すること、たとえば「扶け合い」や連帯を実現するために共済に加入しよう、と呼びかけることは、本末転倒であるといわざるをえない。組合員としての連帯とは、共済金削減規定を理解し、内部補助を受け入れるという合意の結果生まれるものである。つまり、加入後の組合員活動において継続的に共済金支払い状況などに関心を持ってもらうなどの地道な努力によって生み出された連帯こそが協同組合保険にとって重要なのだ。

戦前の保険会社の名称に現れる「共済」のうち、「戦友共済」だけは、「共済生命」および「日本医師共済生命」の「共済」とは異なるものであった。戦友共済保険株式会社は、大正7年に陸軍の将校により設立された「在官在郷の服役中にある軍人のみを以て組織せられたる唯一の保険団」を有する会社であった。同社の募集する戦友共済保険の概要は次のように説明されている。「将校間に設けられて有る義助会と同様の主義に依り軍人相御互に共済する所の組合でありまして、その加入には身体検査を要せず唯約束が成立し保険料さえ掛けて置けば戦時は戦病死者、平時は軍務に死したる時保険料掛金の約四、五倍の金額を呉れます。又保険料払済後五か年を経過すれば払済保険として普通の生命または養老保険に移し掛金高の約二、三倍に相当する保険金」を受け取ることができる（以上の引用は、立永勝三郎「戦友共済保険の説明」大正8年）。同社は、陸軍主計総監の井出治を社長として、顧問に陸軍大将鮫島重雄、陸軍中将宇佐川一正、陸軍中将南部辰丙などが名を連ねていた。

同社はまもなく星一に買収され、星社長のもとで発展を企てたが成功せず、結局、第一徴兵保険に吸収され、同社の契約は第一徴兵保険に包括移転された。（発展企画について詳しくは、星一「生命保険経営に関して縣元、郡元、特約店諸君に告ぐ」を参照）。

第一徴兵保険は、同社を合併後も「戦友共済保険」という商品として既存契約を保持する

とともに、新契約の募集を行った。第一徴兵保険の募集史料から「戦友共済保険」の概要が明らかになる。同保険への加入資格は、年齢 40 歳までの陸海軍現役、予備役、後備役、補充兵役に服務中の者とされ、保険金額の限度額は五千円であった。保険金支払いは、軍務の死亡と平時の死亡で次のように異なっていた。軍務死亡は次の二種類。すなわち戦死の場合は戦友共済保険金全額支払い、平時軍務による怪我または日射病で死亡した場合は戦友共済保険金の 8 割支払いである。平時および病死の場合の保険金給付はない。ただし保険料払込期間完了後 4 年間を経過すると自動的に払済養老保険または払済終身保険に転換し、その契約期間中の死亡に対して保険金が支払われる。経過中の 4 年間には年 4 分の複利で運用されるため払済保険の責任準備金が増額されることが強調されている反面、経過中の死亡については規定がないので、保険金の支払いはなされないようだ。

注意すべき点は、「戦友共済団の決算」の記述である。そこには「戦争変乱に参加された加入者全体を一つの共済組合団体と見做し、此組合の保険料積立金から戦死者には規定の保険金を支払い、帰還者には残余の積立金を以て将来の為に各自の割戻金高に相当する払済養老保険又は払済終身保険を付けます」と述べられている。要するに戦友共済の「共済」は、実質的に保険金削減規定が組み込まれている。この商品は、このような意味で「共済」なのである。

「戦友共済保険」の場合、「共済生命」や「日本医師共済生命」とは異なり、商品内容自体に「保険金削減規定」という「共済的要素」が組み込まれている。そのため「共済」という用語が使われているのである。戦友共済保険株式会社は、保険会社でありながら、前払確定保険料ではない要素をビルトインした保険商品を発売したという点でユニークな事例である。

戦友共済保険ノ説明

大正八年三月二十四日
於吉敷郡分會長會

立永勝三郎

平生分會御中

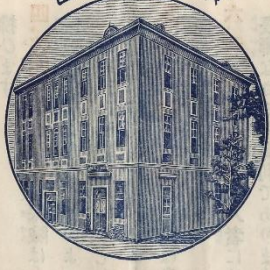
姓名	年齢	性別	職業	加入日	加入金	積立金	満期金
田中 一郎	35	男	商	1918.3.24	1000	1500	3000
山田 二郎	30	男	工	1918.3.24	500	750	1500
佐藤 三郎	40	男	農	1918.3.24	800	1200	2000
鈴木 四郎	25	男	学	1918.3.24	300	450	900
高橋 五郎	38	男	商	1918.3.24	600	900	1800
中野 六郎	32	男	工	1918.3.24	400	600	1200
渡辺 七郎	45	男	農	1918.3.24	700	1050	2100
伊藤 八郎	28	男	学	1918.3.24	350	525	1050
石川 九郎	33	男	商	1918.3.24	550	825	1650
水野 十郎	37	男	工	1918.3.24	450	675	1350
山本 十一郎	42	男	農	1918.3.24	650	975	1950
田村 十二郎	27	男	学	1918.3.24	320	480	960
松本 十三郎	34	男	商	1918.3.24	580	870	1740
林 十四郎	31	男	工	1918.3.24	420	630	1260
森 十五郎	39	男	農	1918.3.24	720	1080	2160
野村 十六郎	26	男	学	1918.3.24	310	465	930
山崎 十七郎	36	男	商	1918.3.24	620	930	1860
斎藤 十八郎	33	男	工	1918.3.24	480	720	1440
高木 十九郎	41	男	農	1918.3.24	680	1020	2040
石川 二十郎	29	男	学	1918.3.24	360	540	1080
水野 二十一郎	35	男	商	1918.3.24	560	840	1680
山本 二十二郎	32	男	工	1918.3.24	440	660	1320
田村 二十三郎	43	男	農	1918.3.24	740	1110	2220
松本 二十四郎	28	男	学	1918.3.24	340	510	1020
林 二十五郎	37	男	商	1918.3.24	640	960	1920
森 二十六郎	34	男	工	1918.3.24	500	750	1500
野村 二十七郎	46	男	農	1918.3.24	800	1200	2400
山崎 二十八郎	25	男	学	1918.3.24	300	450	900
斎藤 二十九郎	38	男	商	1918.3.24	600	900	1800
高木 三十郎	31	男	工	1918.3.24	430	645	1290
石川 三十一郎	44	男	農	1918.3.24	730	1095	2190
水野 三十二郎	27	男	学	1918.3.24	330	495	990
山本 三十三郎	36	男	商	1918.3.24	630	945	1890
田村 三十四郎	33	男	工	1918.3.24	470	705	1410
松本 三十五郎	47	男	農	1918.3.24	820	1230	2460
林 三十六郎	26	男	学	1918.3.24	320	480	960
森 三十七郎	39	男	商	1918.3.24	660	990	1980
野村 三十八郎	35	男	工	1918.3.24	520	780	1560
山崎 三十九郎	48	男	農	1918.3.24	840	1260	2520
斎藤 四十郎	24	男	学	1918.3.24	290	435	870
高木 四十一郎	37	男	商	1918.3.24	610	915	1830
石川 四十二郎	32	男	工	1918.3.24	460	690	1380
水野 四十三郎	45	男	農	1918.3.24	760	1140	2340
山本 四十四郎	28	男	学	1918.3.24	350	525	1050
田村 四十五郎	38	男	商	1918.3.24	650	975	1950
松本 四十六郎	34	男	工	1918.3.24	510	765	1530
林 四十七郎	49	男	農	1918.3.24	860	1290	2580
森 四十八郎	25	男	学	1918.3.24	310	465	930
野村 四十九郎	40	男	商	1918.3.24	700	1050	2100
山崎 五十郎	36	男	工	1918.3.24	540	810	1620
斎藤 五十一郎	50	男	農	1918.3.24	900	1350	2700
高木 五十二郎	27	男	学	1918.3.24	340	510	1020
石川 五十三郎	39	男	商	1918.3.24	680	1020	2040
水野 五十四郎	33	男	工	1918.3.24	490	735	1470
山本 五十五郎	46	男	農	1918.3.24	810	1215	2430
田村 五十六郎	29	男	学	1918.3.24	370	555	1110
松本 五十七郎	41	男	商	1918.3.24	720	1080	2160
林 五十八郎	37	男	工	1918.3.24	570	855	1710
森 五十九郎	51	男	農	1918.3.24	930	1395	2790
野村 六十郎	26	男	学	1918.3.24	330	495	990
山崎 六十一郎	43	男	商	1918.3.24	750	1125	2250
斎藤 六十二郎	39	男	工	1918.3.24	590	885	1770
高木 六十三郎	52	男	農	1918.3.24	960	1440	2880
石川 六十四郎	30	男	学	1918.3.24	380	570	1140
水野 六十五郎	44	男	商	1918.3.24	800	1200	2400
山本 六十六郎	38	男	工	1918.3.24	620	930	1860
田村 六十七郎	53	男	農	1918.3.24	1000	1500	3000
松本 六十八郎	27	男	学	1918.3.24	360	540	1080
林 六十九郎	45	男	商	1918.3.24	850	1275	2550
森 七十郎	42	男	工	1918.3.24	670	1005	2010
野村 七十一郎	54	男	農	1918.3.24	1050	1575	3150
山崎 七十二郎	28	男	学	1918.3.24	390	585	1170
斎藤 七十三郎	47	男	商	1918.3.24	900	1350	2700
高木 七十四郎	43	男	工	1918.3.24	700	1050	2100
石川 七十五郎	55	男	農	1918.3.24	1100	1650	3300
水野 七十六郎	31	男	学	1918.3.24	410	615	1230
山本 七十七郎	49	男	商	1918.3.24	950	1425	2850
田村 七十八郎	45	男	工	1918.3.24	750	1125	2250
松本 七十九郎	56	男	農	1918.3.24	1150	1725	3450
林 八十郎	29	男	学	1918.3.24	430	645	1290
森 八十一郎	50	男	商	1918.3.24	1000	1500	3000
野村 八十二郎	46	男	工	1918.3.24	800	1200	2400
山崎 八十三郎	57	男	農	1918.3.24	1200	1800	3600
斎藤 八十四郎	32	男	学	1918.3.24	450	675	1350
高木 八十五郎	51	男	商	1918.3.24	1050	1575	3150
石川 八十六郎	47	男	工	1918.3.24	850	1275	2550
水野 八十七郎	58	男	農	1918.3.24	1250	1875	3750
山本 八十八郎	33	男	学	1918.3.24	470	705	1410
田村 八十九郎	52	男	商	1918.3.24	1100	1650	3300
松本 九十郎	48	男	工	1918.3.24	900	1350	2700
林 九十一郎	59	男	農	1918.3.24	1300	1950	3900
森 九十二郎	34	男	学	1918.3.24	490	735	1470
野村 九十三郎	53	男	商	1918.3.24	1150	1725	3450
山崎 九十四郎	49	男	工	1918.3.24	950	1425	2850
斎藤 九十五郎	60	男	農	1918.3.24	1350	2025	4050
高木 九十六郎	35	男	学	1918.3.24	510	765	1530
石川 九十七郎	54	男	商	1918.3.24	1200	1800	3600
水野 九十八郎	50	男	工	1918.3.24	1000	1500	3000
山本 九十九郎	61	男	農	1918.3.24	1400	2100	4200
田村 一百郎	36	男	学	1918.3.24	530	795	1590

★ 戦友共済保険火災

本社 戦友共済生命保険株式会社
東京市京橋區日吉町八番地

社長 陸軍主計總監 井出治
陸軍大將 男爵 鮫島重雄
陸軍中將 男爵 宇佐川正
陸軍中將 南部辰丙
陸軍主計總監 辻村楠造

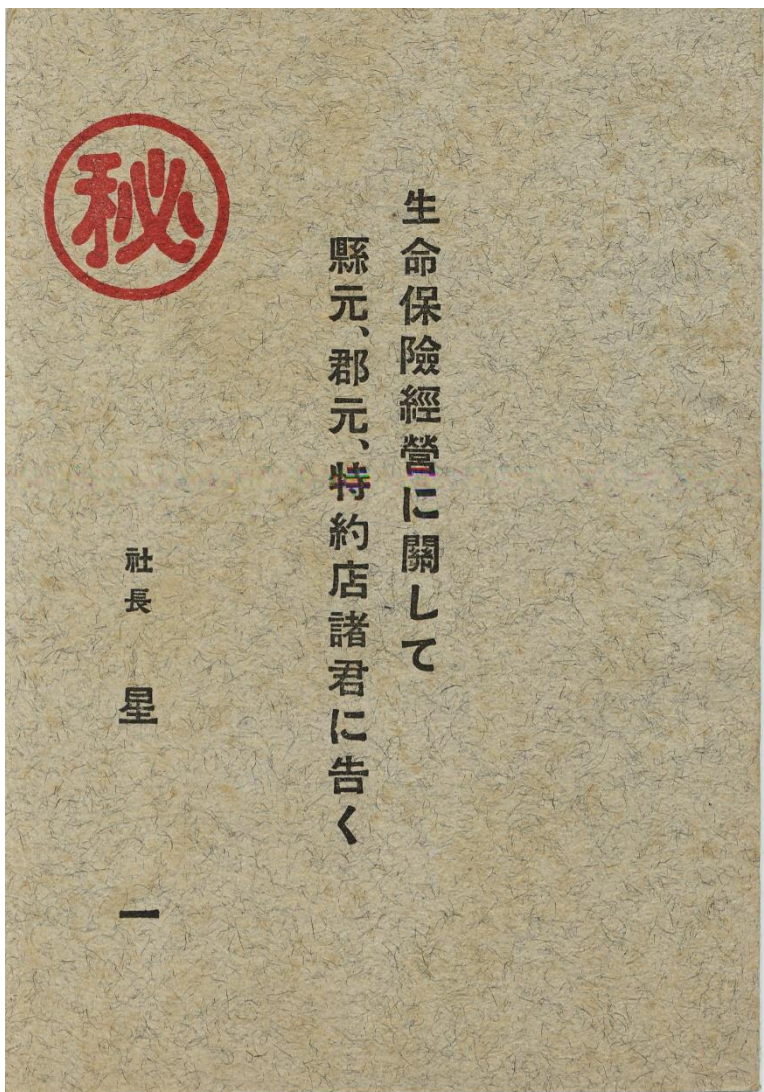
資本百萬元



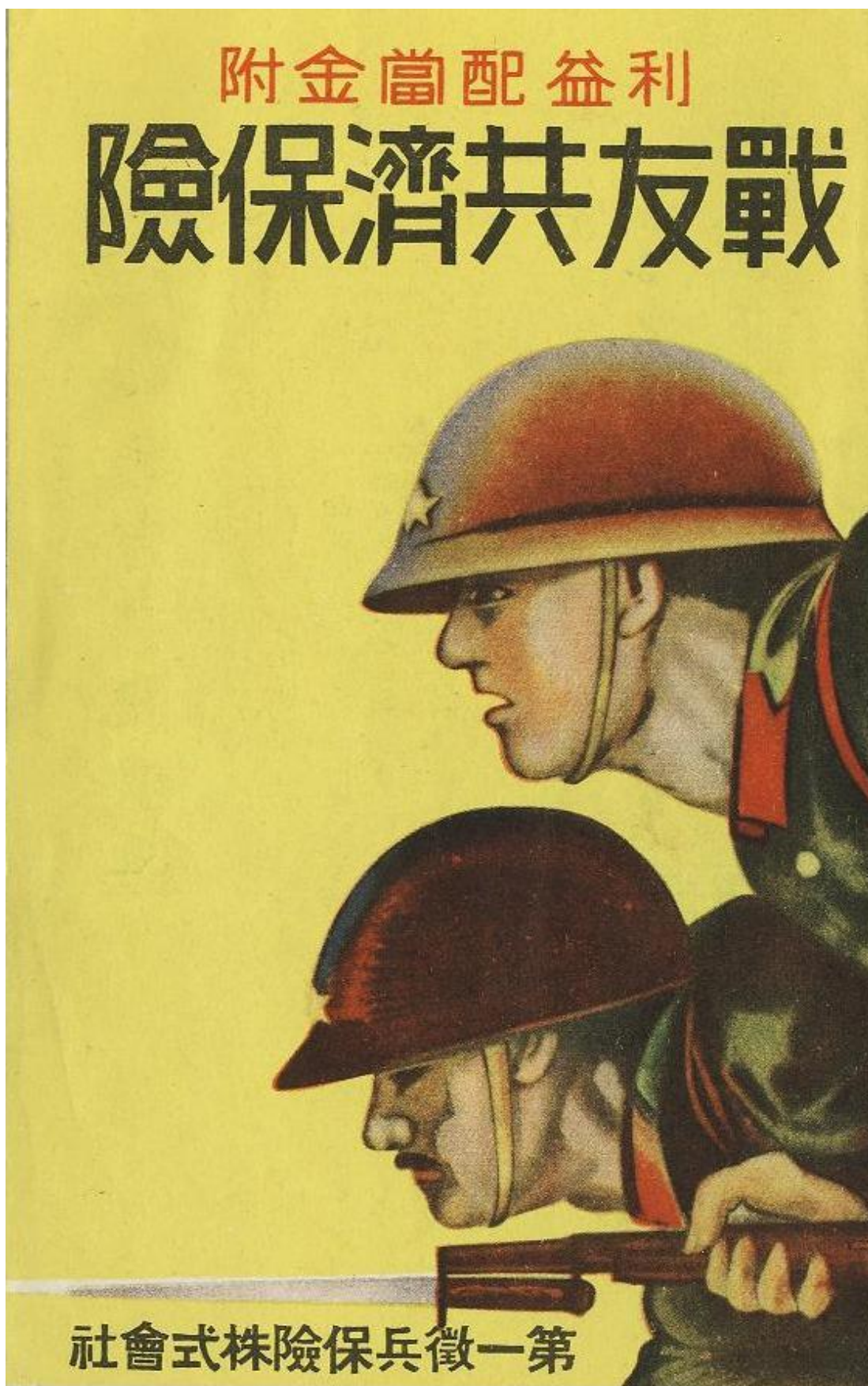
取務役社長 井出治
専務取締役 内山敬三郎
事務取締役 安川隆治
取締役 廣橋嘉七郎
取締役 黒住弘毅
取締役 日黒孝平
取締役 依田英一
監査役 浦邊襄夫
監査役 吉野周太郎
監査役 龜田良吉

番九〇六・番八〇六 銀座電
番八〇六〇 四京東座口金貯替振

表額金險保通普濟拂			
(付1圓十壹金險保濟共友戰)			
四四四四四	四三三三三	三三三三三	三二二二二
五四三二一	〇九八七六	五四三二一	〇九八七六
歳歳歳歳歳	歳歳歳歳歳	歳歳歳歳歳	歳歳歳歳歳
四四四四四	五五五五五	五五六六六	六六六六七
四五六七八	〇一三四五	七八〇一二	四五六七八
一二三五六	四八二六	一六〇五〇	五九三六九
六二六五〇	四三三三三	四一八四一	一五五八二
〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇
四四四四四	四四四四五	五五五五六	六六六六七
一二三四五	七八九一二	四五六七八	一二三四五
三三三三三	二二二二二	一一一〇一	〇〇〇〇〇
〇九三三六	五八四四六	〇五二九六	三三〇六三
〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇
三三四四四	四四四四四	五五五五五	五五六六六
八九〇一三	四五七八	二四四七	八九二四
四四七七一	三六〇三七	二六〇五〇	四九三二〇
九八二九一	七八二九九	一四九五一	八二四二二
〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇
三三三三三	四四四四四	四四四四五	五五五五六
四五六七九	〇一二四五	六八九一二	四五五六八
六七八九一	二六九二六	九三三二六	〇九三三六
四一二七五	七三二五〇	七七八〇〇	八二四二九
〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇



附金當配益利
險保濟共友戰



社會式株險保兵徵一第